指定討論2

野上　元

筑波大学の野上です。よろしくお願いいたします。私の専門は歴史社会学という学問でして、戦争の社会学的な研究をしたいと思って大学院に進んだ一〇数年前は「そんなのがテーマになるのか。戦争を社会学で扱えるのか」とよく言われました。ですので、それから一〇数年たって、戦後六五年ということもあるのでしょうけれど、このようなシンポジウムで戦争が、社会学だけではなくて、いろいろな学問に扱われる対象になったことが、それだけで私には感慨深いものがあります。

今日のシンポジウムでもいろいろな話が進んでいて、僕なんかもう、お腹いっぱいで、勉強させていただきました、終わりましょう、家に帰ってまたそれぞれでじっくり考えましょう、というくらいの気持ちです。私なんかがもう話すことなんか全然ないかと思ったりもします。

ただ、一つ思ったのは、さきほど話された中田さんの話ですね。一九四五年生まれ。まさにお腹の中で体験した体験者。うちの母が一九四四年三月生まれで、母親の母親、私にとっては祖母が空襲を体験しています。そんなに危ない目に遭ったわけではないらしいんですけれども、避難ぐらいはしたらしい。運が良かったわけで、もしかしたらうちの母が、中田さんのお話に出てきた死んだほうの赤子なわけですね。一歳くらいだったわけですから。何かが乗り移ったような中田さんのお話も印象深かったですけれど、死んだほうの赤子は自分の母親であった可能性があると気づいた瞬間、急にお話に対する距離感が変わりました。

さて、私から一つ、このシンポジウムにつけたすことがあるとすれば、「視点を変えよう」ということです。これまでですでにすごく大事な話がされていると思うんですが、ちょっと視点を変えてみよう。それだけです。視点の変え方に納得がいかないこともしかしたらあるかもしれないですが、それはお許しください。あるいは討論の中で話していきたいと思います。

視点を変えるというのは何かというと、今までの話は、いかに残すか、いかに記録するかというものでした。それは「六五年」によって時間的なリミットが発生しているからですが、いかに残すかということばかりが話し合われている。それはもちろん重要なことです。だけれども、もう一つ私が考えたいのは、次の世代がいかに読むかという問題だと思うんです。その話を今日はしたいです。視点を変えようというのはそういうことです。未来の話なので、ここまで話しあわれたことに関してはちょっとずれるかもしれませんが、視点を変えるということで聞いていただければと思います。私の話は徹頭徹尾それだけですね。その話ができればいいなと思っています。

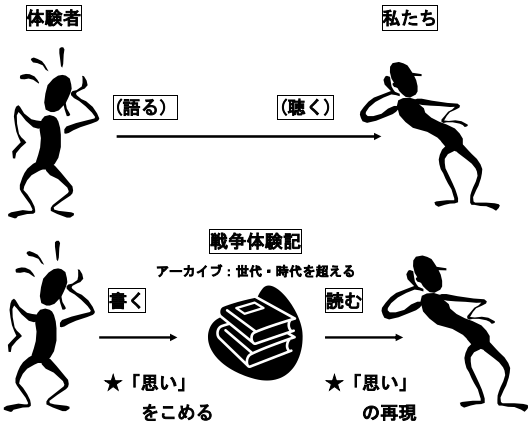

図１　社会学における「戦争体験」についての分析

次の世代がそれを読むかという問題なんですけれども、パワーポイントを用意してきましたが、それに入れてなかった内容です（図1）。いかに残すかというのは、体験者がいて、記録を残すわけですね。オーラルヒストリーの力をかりて、あるいはボランティアの人の力をかりて、記録を残したりアーカイブ化をすることですね。これに注目が集まっている点はよくわかります。そして、ものを書くときには、「思い」というものがあります。言葉にならない部分とか記録に残せなかった部分が必ずあります。映像にしたとしても全部残しきれるわけではありません。

私がここで、もう一歩視点を変えるということで言いたいのは、次の世代なんです。それは、読むということです。言ってみれば、ここにある「思い」の再現です。この「読む」ということがわからないと、「思い」の再現をどのようにするのか。記録は大事だけれども、記録でしかない。でも、本当に体験の中で大事なのは記録に込めた「思い」の部分で、必ずしも残らない可能性だってあるんです。それを、読むことによって再現したり、追体験していくことは次の世代の問題だと思うんです。こっちのほうをちょっと考えてみたい。

ただ、先ほど言いましたけれども、アーカイブ化をすることによって、ここととここ（図1の下の部分の左右）は同じように書きましたけれども、いったん記録されれば時間を超えることができますね。一度記録をしておけば、数百年たっても読むことはできる。記録というのは時間を超えることができる。

先ほどの中田さんは、ご自身の母親の経験ということもあるのでしょうけれど、記録にしないで、「思い」の部分を母親に乗り移るようにして話をされていまし

問題意識（視点）

「戦争体験」について、（歴史）社会学的な分析を行う。

A）人々に「戦争体験」を語らせたり（／聞き取らせたり）、「体験記」を書かせたり（／読ませたり）する力を分析すること。

B）「戦争体験」を、歴史的・同時代的な状況のなかで説明すること。

図２　社会学における「戦争体験」についての分析

た。中田さんのお母様が体験されたことを「思い」とともに受け止めて、それを語りの中で再現していくということをしている。それで、私たちはそれを聞いた。

でも、中田さんの次の次の世代だったら、中田さんのおかげで誰かが乗り移ったかもしれないけれど、その次また乗り移る、だんだん乗り移っていくことがどうなっていくのかなというのが気にはなります。それはまた別の話として、とりあえず記録が残される。それを読む。思いをどう再現するかとか、追体験するか。そのときに、どうやったらできるのか、あるいはどうしたらそれができたことになるのかを考えてみたいと思います。

いろいろ用意してきたんですが（図2）、まだうまく説明できていない感じがするんですね。歴史社会学なんて言いましたが、何学でも何でもいいです。とにかく重要なのは人々に戦争体験を語らせたり、戦争体験記を書かせたりする力を分析すること（A）と言っておきます。

それと、僕は今回の発表の中では（B）も大事だと思うんです。戦争体験、戦争体験と言っているけれども、ほんとうは戦争体験は戦争の数だけあるんです。となると、六五年近く前に終わったアジア・太平洋戦争だけが戦争なわけじゃなくて、その前には日露戦争、日清戦争体験があるし、戊辰戦争を体験した人もいたはずです。だから、この戦争体験という言葉を六五年前に終わった戦争だけでとどめずに、いろいろな戦争体験を想像する。それは、未来に対しても想像することです。あるいは現在に対して。歴史的な状況の中で、戦争体験という言葉を広げて、戦後社会だけにしないというのが僕の皆さんにお話ししたいことです。例えば日清、日露戦争の戦争体験というのがあるだろうし、今の戦争、あるいはあとで言いますけれども、冷戦という戦争もあったんじゃないかと思います。

自己紹介もしようと思います。私がどのようなことをしてきたかというと、一番印象的な体験としてあるのは、戦争体験の聞き取り調査ですね。今から一四、五年前、つまり戦後五〇年ということで、ある村が戦争体験の文集を作りました。私もその村に行く機会があって、戦争体験記を書いた「思い」の部分を取材して回ったんです。私自身でアーカイブ化をするというよりは、すでに書かれていた体験記の書き手が込めようとした「思い」をインタビューして回る仕事をしました。それが一二、三年前です。普通の戦争体験の研究者だと、どんな体験をしたのかということばかり聞くんですけれど、私は「何を書きたかったんですか」、あるいは「書けなかったことってありますか」とか、そういう質問をしていました。ほかにも戦争体験を聞く人がいたでしょうから、それはそっちに任せて、僕にしかできない視点で調査しようと思ってやったんです。

それは最近になってくると、どんどん亡くなっていくんですよ。村に着いてまずするのは、誰が死んだという噂を聞いて、「ああ、そうですか」と。さらにずうずうしく、遺族や奥さんのところに行って、「線香をあげさせてください」とか言って上がり込んで、さらにだんなさんについて、「お父さん、どん

なことを話されていましたか。戦場での体験をどんなふうに伝えていましたか」と取材したりすることもやったりしてきました。でも、それもだんだん難しくなってきて、だんだんと戦争体験者が死んでいく、戦争の記憶が死んでいく様子を、言い方は悪いですが定点観測させてもらっています。だから、体験が今失われているから、慌てて全部記録しなくてはいけないというのとは、私の問題意識は違う。時間がたてばだんだん記憶が薄れ、それを語る人が少なくなっていき、それに対する想像力も薄れていく。でも、一方で記録は残る。社会の中で戦争の記憶がどのような薄まり方、消えていき方をしているのか、そして逆にいえばそれでも残るものは何かという調査をしています。

あとは、戦争体験文学、文学に表れた戦争や戦争の体験を分析します。あとは、論争っぽいところを見つけて、戦後社会の中で考えていくということがあります。

あとは、これも社会学というか、文化の社会学ですけれど、例えば映画の文化の中で、一見戦争映画でなくても、どこか戦争のことを語っていたり、記憶が入っていたりする。それをいろいろなものの中から見つけ出してくる。関係ない映画の中にも戦争体験の影響がふっと入っていたりする、そういうことをしています。ですから、記録を残さなければいけない、ということはすごくわかるし、価値があることですが、私はそれとちょっと視点が違うことをしてきたのだろうと思っています。

自己紹介はこれくらいにして、本題です。一人目の人物です（図3）。「安田武」というのは、戦争体験の記録運動にだいぶ思想的な影響力を残した知識人です。自分自身が戦争体験している人です。その人が一九六三年に、『戦争体験』（未來社、一九六三年）というタイトルの本を書いている。ここに書いてあるように、彼の世代は日露戦争の戦争体験の武勇伝を、悲惨な話も含めてですけれど、さんざん聞かされてきたんですね。つまり、戦前の日本は、戦争が終わったら次の戦争がまた来るのが確実な社会でしたので、「おまえら聞いておけよ。次、今度はおまえらが戦争に行くんだからな」と、説教のように上の世代から聞かされていたんですね。

けれども戦後になって、自分が帰還してきたら、誰も聞いてくれない。あるいは、聞いてくれるんだけれども、政治的なほうに引っ張ろうとするのもあったりする。日清、日露戦争の体験は敗戦の日まで自分を支配したんだけれども、自分

安田武『戦争体験』（1963）より

「ぼくのおやじは、日清・日露戦争を「体験」したが、ぼくはむろんしていない。日清・日露の戦争体験は、敗戦の日までの日本民族全体を支配し、立派に生きつづけ、ぼくらの仲間の多くはそこで死んでいった。<u>日清・日露の体験は生き、太平洋戦争の体験は、なぜ死滅しそうになっているのか</u>。」

図3　安田武の『戦争体験』から

たちがしゃべろうとすると誰も聞いてくれないという孤立感があった。さらに、ちょっと下の世代で言うと、新しい文学者たち、典型的には石原慎太郎などが戦争体験世代の文学を、めそめそしている、とか言ってくる。それに対して非常に疎外感を感じていたのが安田武です。

もうちょっと分析すると、安田武の思いは、「右」の戦争体験利用は嫌だ。つまり、「英霊」によせて再軍備に走らせようとする、戦争を賛美するような戦争体験の利用は嫌だし、「左」の人たちが、「あれは犬死にだった」とか言ってくるのも両方とも嫌だというものでした。それで、孤立感がずっとあったんですね。

それを理解するために、先ほどの「戦争体験」という言葉を六五年前に終わった戦争体験だけにしないで、もうちょっと延ばしてみるとわかりやすい。日清、日露戦争からアジア・太平洋戦争までの戦争体験の考え方に対する社会的な考え方の連続があり、そして、戦争が終わったあと、安田武が孤立したように、断絶するというのがあったのではないかと思います。これが六〇年代の状況です。

私が戦争体験の聞き取りの調査をし始めた頃（一九九〇年代半ば）に衝撃的だったことがこれでした。

> 量としては、まだまだ書き足りないと思うねえ。半分も書いていない。書けなかったからやめちゃったんだね。まだ書き足りないこともあるけど、やめたほうがいいやねえ。軍隊の生活、ひでえもんですよ。かっぱらいが多くてねえ。上官なんかにも悪いのがいてさ…。（そんなことを）書いたって、面白くないからねえ。…だからもう書かない方がいいんじゃないか。残したって誰も喜んでくれないよ。（一九九〇年代半ば、体験者への聞き取り調査から）

戦争体験記を書いた人の思いに対する取材を続けている中で、こういう言葉に出会った。九〇年代半ば、つまり、戦後五〇年というところではまだこういう気持ちがあって、私にそれを聞かせてくれる感じでした。

一方で、諦め、照れもあるかもしれない。「おれの体験なんて大したことないけど」とか言って、「もっと偉い人が書けば」みたいな感じもあるかもしれない。そうはいっても、いま（スライドで）写っているのが村で出された戦争体験記の文集なんですけれども、書くんですね、照れながらも人間というのはやはり書いてしまう。「思い」を書くということがある。それを私たちはどう読み取ることができるのかという問題意識がある。

さてこれは最近の運動です。「戦場体験放映保存の会」というのがあって、そこで言われるのが、兵士たちの「語らずに死ねるか」という思いです。「無色、無償、無名」という思いをもとにした兵士たちのネットワークが生まれました。戦場からの帰還兵士たちの思いの中で記録をしていこうという運動です。

その背景にあるのは、「もう時間がない」という思いです。

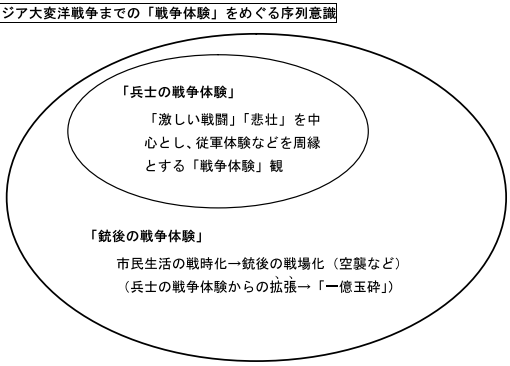

図４　アジア太平洋戦争までの「戦争体験」をめぐる序列意識

もう一つは、「無色、無償、無名なら語ってもいい」という言い方です。つまり無色というのは、安田武にもあったように、政治的な利用はされたくないということです。何か政治に利用されるために自分たちの仲間が死んだわけじゃないんだというのがある。「無色」なら語ってもいい。無償というのは、自分が目立ったり、偉いんだというためではなくて、戦争体験というのはある意味の公共的な財産だという意識が裏にあるから無償になるんだと思います。あとは、無名というのがあります。無償と近いですけれども、何か有名になるためにやっているのではなくて、自分の裏には常に死んだ戦友のまなざしがあるという考え方です。

まとめてしまうと、安田武が感じた、戦争体験を語ることへの孤立感やとまどいは、時間的なリミットの中で急激にまとまっていくところがある。リミットの中で、今しかもうないというかたちで語られていることがあるわけです。

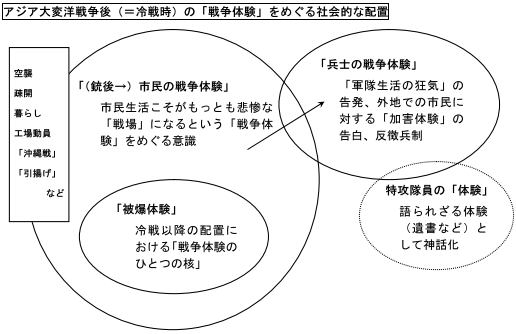

図５　アジア太平洋戦争（＝冷戦時）の「戦争体験」をめぐる
めぐる社会的な配置

ただ、今まで話してきたのは全部兵士の話です。空襲の話は全然ありません。長野の村ですので。先ほどの戦争体験の記録集には市民の戦争体験、空襲の体験も多少は書いてあるんですけれども、一番あるのは兵士としての体験です。やはり農村だからだと思います。そこでは、安田武の言う日清、日露戦争を語る戦争体験観がまだ残っていたんじゃないか。だからそういうふうになるんですけれど。それに対して、今言われたような疎開の体験や銃後の暮らしのような、あるいは空襲の体験のようなものは兵士の体験とどのような関係にあるのかという問題意識が当然出てくるわけです。

ちょっと見えにくいんですが（図4）（図5）、安田武の言う日清・日露から太平洋戦争までの戦争体験観はこのような感じです。中心は兵士の戦場体験ですね。一番華々しいのが戦闘で

す。戦闘体験をしゃべるときは華々しくしゃべれる。もちろんひどい目に遭ったこともしゃべるわけですけれども。そして銃後の戦争体験というのはその周りを支えるような形でした。それが戦後の一九六〇年前後になると、中心にあった兵士の戦争体験が外側に行きます（図5）。安田武たちが感じた孤立感、聞き手がいなくなったんですね。つまり、同じような戦争がもうないということがわかった。日本は戦争放棄・絶対平和をとりましたので、徴兵制復活みたいな論争もありましたけれども、兵士の戦争体験は端っこにやられる。その代わり、中心に入るのは冷戦下に意味を増してきた被爆体験ですね。それが中心に入る。一般市民の戦争体験が重視されて、戦争体験を巡る配列はだいぶ再編成されます。

そこで、私の一つの提案です。戦争体験観がこのような配列になったときに、私たちは兵士の戦争体験を含めて、戦争体験に記録された思いをどのように読み取っていくのか。そのような問題意識を持つための次の時代・世代に向けての提案です。日清、日露の戦争体験は、太平洋戦争まで生き延びて、安田武を縛った。けれども、戦後の社会はそれを聞く耳をあまり持たなかったというのが安田武です。それが最後になってくると、最近は聞く耳があるようになりますが、次の世代に伝えるのは難しい。ですから、これは視点というよりは提案ですね。

「私たちも戦争体験者だと考えることはできないか」というのが提案です。問題意識が、「どう読むか」という話であるとすれば、提案は「自分も戦争体験者であると考えること」です。

それは、冷戦という戦争の体験者であるということです。核戦争によって都市が一気にひどい目に遭うということで言えば、無差別空襲の戦争体験は核戦争時代の戦争体験の最初ですよね。現代に生きる私たちは冷戦という戦争の生き残りであるんじゃないかと考えてみようと思います。空襲の生き残りが空襲の語り部になったように、冷戦の生き残りになったんじゃないか。冷戦という戦争の現実感／非現実感を考える必要があるんじゃないかと思います。

それが体験者の思いを次に伝える、あるいは読むときの当事者性となる。自分をあてはめてみる。中田さんのように乗り移っていくための一つの方法なんじゃないか。

一方で、ベトナム戦争や朝鮮戦争、湾岸戦争、イラク戦争のように、「テレビで見る」ことは体験したことなのか、していないことなのか。普通に考えれば兵士として戦場に行った人が「体験」していました。テレビを見ている人は「体験」していないという考え方ですけれども、見ている戦争も、ある種の体験なんじゃないかと考える。それによって、読むときの「思い」の再現にも使えるんじゃないか。常に新しい戦争の中で私たちは目撃者になり、そして当事者になる。新しい戦争との比較の中で、過去の戦争体験の記録や語りのアーカイブを読み解いていくことができるのではないかと思います。

ですから、歴史社会学的に言えば、「戦争体験」を時間軸の中で少し広げて考える。六五年前に終わった戦争だけじゃな

くて、その後も戦争はあった。冷戦が終わったとしても、新しい戦争が行なわれているとすれば、その体験者としての当事者性を考えていく。だから、社会学が戦争のことを扱わないというのは間違いですし、学問的にいろいろ考えることは、常に今の戦争のことを考えることとつなげていかなければいけないと思います。その中で、戦争体験を次の世代がどう読むか、どう受け継ぐかということが考えられるのではないかと思います。ありがとうございました。